

川崎病による冠動脈閉塞による有症状の割合について

分担研究者 神谷哲郎，津田悦子 国立循環器病センター小児科

研究要旨：川崎病冠動脈障害において、冠動脈閉塞に伴う有症状の割合について検討した。また、各枝別について有症状の割合と時期について検討した。冠動脈閉塞にともなう有症状の割合は 30% で死亡は 4% であった。枝別による有症状の割合に有意差はなかった。閉塞の時期については、RCA は早期からおこり、LAD は RCA に比べ、早期より遠隔期に多かった。

A．研究目的

川崎病冠動脈障害において、冠動脈閉塞は心筋梗塞をまねき死亡にいたることもあり、そのような事態を防がなくてはならない。しかし、逆に症状がみられず、冠動脈造影で閉塞を確認する場合もまれではない。冠動脈閉塞に伴う有症状の割合について検討することは重要と考える。われわれは、川崎病冠動脈障害において、冠動脈閉塞に伴う有症状の割合について検討した。また、各枝別について有症状の割合と時期について検討した。

B．研究対象

対象は当院で選択的冠動脈造影(CAG)が施行され、冠動脈閉塞またはセグメント狭窄が確認された症例 97 例である。一枝閉塞は 65 例、二枝閉塞は 30 例、三枝閉塞は 2 例であった。枝別にみると、右冠動脈(RCA)閉塞 80 例、左前下行枝(LAD)41 例、左回旋枝(LCX)10 例でのべ 131 例であった。

C．研究方法

当院における CAG のプロトコールは川崎病急性期がすぎた時点で初回冠動脈造影を施行し、

その後1年後にフォローアップのCAGを施行し、冠動脈障害が残存する場合はその後は 3-5 年後に 1 回施行した。有症状とは胸痛、背部痛、上腹部痛、不機嫌、顔面蒼白、嘔吐、ショック状態、心停止のいずれかとした。

このフォローアップの CAG で冠動脈閉塞が確認された症例において、症状の有無について検討した。有症状の症例についてはその時期について検討した。死亡例については発作時の心電図が剖検例で責任冠動脈が判明しているもののみを対象とした。

D．研究結果

冠動脈閉塞にともなう有症状の割合は 39 例 (30%) であった。死亡例は 5 例で 4% であった。枝別にみると RCA19 例 (24%)、LAD18 例 (44%)、LCX2 例 (20%) で枝別による有意差はみられなかった。有症状の時期を I 期 100 未満、II 期 100 日以上 1000 日未満、III 期 1000 日以上に分けると、RCA では I 期 7 例 (39%)、II 期 6 例 (30.5%)、III 期 6 例 (30.5%) であった。LAD では I 期 2 例 (11%)、II 期 7 例 (39%)、III 期 9 例 (50%) で、LCX では I 期 1 例 (50%)、II 期 0 例 III 期 1 例 (50%) であった。

心停止をきたした症例は RCA2 例、LAD5 例で
そのうち、RCA1 例（50%）、LAD4 例（80%）
が死亡した。

E . 結論

冠動脈閉塞にともなう有症状の割合は 30%で死
亡は 4%であった。枝別による有症状の割合に
有意差はなかった。閉塞の時期については、RCA
は早期からおこり、LAD は RCA に比べ、早期
より遠隔期に多かった。